

かぐや様は告りたい

速川渡

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

え？ タイトル通りの作品ですとも。

目

次

かぐや様は告りたい

かぐや様は告りたい Return

4

1



# かぐや様は告りたい

私立秀知院学園！元貴族士族校であり、その制度が廃止された今でなお、富豪名家の出の者や天才秀才が集まる200年の伝統を持つ名門校である。

その生徒たちを纏め上げる生徒会役員達が凡人であるなど許される筈もない！生徒会副会長、四宮かぐや！ 国の四大財閥四宮グループの本家本流の子女であり、正真正銘の令嬢である。

その四宮が支える男こそ、生徒会長白銀御行！

質実剛健、聰明叡知、頭腦明晰。彼は貴族富豪の類いではなく、その頭脳と立ち振舞いから生徒会長の座に選ばれた。己が力で皆から生徒会長へと押し上げられた、カリスマを持つ者である。

そして、この生徒会室の中で、彼らは互いに思惑を巡らせていた。

その思惑とは、即ち。

どうやつて、相手に想いを告白する伝えるか！！

恋愛において告白を受け、了承すると言うことは即ち、敗北を意味する。

告白するという行為は求める心、相手を想う気持ちがその相手より強いことを意味す

る！つまり、気持ちにおいて告白を受け入れる側より勝つているのだ！告白とは、相手を自分で特別な者とすると言う契約である。契約を持ち掛ける側と契約書にサインをし受け入れる側でどちらが有利なのかは明白。告白をした方が負けと言うのは、恋愛初心者の言い訳に過ぎない。告白をした者こそが真の勝者となり得るのだ。

なので、校内で噂をされるようなことがあれば、

「噂されているようですね。私たち」

「噂など、気にすることはないだろう。しかし、俺はお前とそういう関係になつてもいいと思つてている」

「あら、会長つたら。お上手ですね、うふふ。私会長のそういうところが好きですよ」「ははは、友人として同じように感じているよ。ただ、その先の関係にも興味はあるがな」

うふふ。

あはは。

というような、ちょっとビターな関係を醸す二人である。

いや、会話 자체はビターどころかドロ甘であつたが、とにかくお互いが告白とも取れるような言葉を上手く躲してカウンターし合うという文字通りの恋愛頭脳戦がここに

はあつた。

そんな日々を繰り返して、繰り返して半年。その間に二人は、互いに気の置けない親友のような関係に至っていた。互いに下の名で呼び合い、崩れた言葉で話して、普通に仲良くなっていた。

「御行」と呼びかけたかぐやが資料を渡し、

「ん、かぐや」と返事をしつつもそちらに目をやらずに、受け取つて

「はい」とかぐやが返事をしたかと思えば、給湯室に向かう。

何が起こつたかわからない人のために説明をしておくと、かぐやは処理の終わつた仕事を白銀に渡し、目も合わせることなくその資料を受け取る白銀。そして、もうすぐ仕事が終わるから茶の準備でもしてくれと白銀が名前を呼び掛けただけで、その意をくみ取つたかぐや。

以心伝心を体現できる程に、互いの思考が読める二人には、その場にいるFふじわら書記も嫉妬を通り越してドン引きするほどで、石上会計が青春ヘイトを忘れてドン引きほどであつた。

彼らの恋愛頭脳戦はこれからだ！

# かぐやは告りたいReturn

かぐやは悩んでいた。ある程度の仲になれたのだから、ここは白銀と二人何処かに遊びに誘うと言う行動をそろそろ起きた方が良いのではないかと。いや、それはもう決定事項であり、問題は何処へ遊びに誘うかである。男友達と遊ぶという経験が皆無に等しいかぐやは、最近話題の恋愛映画の情報を掴む。題はラブリフレイン、男女で見ればその二人は結ばれるというジンクスのあると触れ込みの映画。

これを利用すれば告白など簡単に実行できる。  
と言うのは三流の発想である。

何故なら、そんな白銀はそんな緩い告白などあっさり流して、普通に了承し恋愛映画を鑑賞後いつものが始まるだけである。

では、これを利用しないで他の映画があるいは、別のプランを考える。  
と言うのは二流の発想だ。

この情報を白銀が確認していない、把握していない筈もない。単にこちらから誘うか向こうから誘われるかの違いである。であるならば、ケチ貧乏の白銀に自腹で当日チケットを買わせるより、前売りチケットを渡す方が、彼に貸しを作れる上躊される可能

性が高いとはいえた告白のチャンスも出来る。

故に今回の頭脳戦のキモは告白としか受け取れない恋愛映画のチケットの渡し方である。

白銀はその恋愛映画ラブリフレインの情報を確認して、かぐやが以上のようないい思考をし、チケットを渡していくと言ふことを推察した。そして、彼女の肝心の受け渡し時の行動、発言、それに隠れた彼女の意図それらをある程度予測する。

互いに相手の事は自分の事のように理解し合っているが、F<sup>ふじわら</sup>という不確定要素<sup>カオース</sup>の介入は避けたい。では、生徒会室で受け渡しはあまり望まれない。かといって、教室や廊下でと言うのは、周囲に生徒が居ることを考えると邪魔が入る可能性もあるし、F<sup>ふじわら</sup>が突然現れる可能性が有るためこれも望まれない。なお、この二人の頭脳戦の最中に藤原書記は顔真っ赤になつて、しそつちゅう生徒会室から逃げ出していたりするので、割りとその心配は無かつたりするが、二人は気付いていない。

告白をするのであれば、二人きりの状況で受け渡しが理想系である。となれば、受け渡しのチャンスは絞られる。

互いに学んだことを教え合う週一回の勉強会である。

「と、こつちはこんなところだな」

「成る程、流石御行。分かりやすいわ、私の専属講師になる気はない？ 給金弾むわよ」「こちらも教えて貰っているのだから、お互い様だろう。魅力的な提案ではあるがな、こつちが色々教えられてしまうのでは意味がない。俺のことをもつと知りたいというなら、別だけどな」

「そうね、残念なのは金銭が関わる契約なことかしら。それがなくとも、貴方は応えてくれる？」

「今の状況こそ、かぐやの言う所だろう。これ以上を求めるなら、それこそ愛の言葉を囁き合う位しか思い付かないな」

「ふふ、それこそ今の話でしょ。脱線したわね、今度は私の方が教えてあげる」これが彼らの日常会話である。甘言を甘言で上塗りして送り返し続けると言う、胸焼けしそうな会話だがこれでお互いまだ牽制をし合っているだけだ。恐ろしいことに。

この勉強会は互いにテストの正答率を高める為の協力関係だ。本来なら、順位のために潰し合いをするようなこの秀知院学園のテストだが、毎回一位と二位の座を競い合うなら条件を平等にして正々堂々の勝負としよう、普段の学習も共有することにしたのである。これは、互いにそれだけ自分に自信を持てているからこそ、成り立っている。生徒会権限で教室を一つ借りて互いに、自分の学んだことを教え合う。それはある意

味、勉強会の名を冠したデートである。

二人の特別な時間は、軽いジャブ二人にとつては。他人なら、悩殺される程強烈。を繰り返し終わりを迎えるようとしていた。

そこで、かぐや仕掛ける。

「そう言えば、御行。週末は珍しく時間があると言つてたわよね」

白銀この時点で、かぐやの狙いを悟る。当然、かぐやはバレることを理解していた。相手の心は自分の事のように把握出来る。ならば言葉など必要ないとと思うかもしれない。しかし、だからこそ言葉にして想いを伝えるということに意味がある。言葉に出来ない想いを言葉に変換して伝えることこそ、告白と言うものだからだ。

「ああ、言つたな。予定がないから暇だと。なんなら、かぐやと過ごすというのも悪くないかもしねないな」

「そう、そう言つてくれて嬉しいわ。映画の前売りペアチケットを貰い受けたのだけど、この映画『<sup>いわく</sup>日付<sup>いわく</sup>』があるようなの」

「ええ、重い呪いよ。何でも男女で見ると二人は結ばれるらしいわ」

「ほう、それは大層な呪いだな。しかし、かぐやとならその呪いを受けても良いと思える」

「いいえ。いけないわ」

貴方は良くても私はダメ。

その発言に白銀は困惑する。その意図が読めないからだ。以心伝心、相手の心は分かつてもテレパシーをしているわけではない。当然、わからない領域と言うのは存在する。知らない一面はある。

当惑した白銀の様子に心で蠱惑的な笑みを浮かべて、言葉を続ける。

「だって、一度結ばれてしまえば私。離したくなくなつてしまふ。縛つてしまふわ。今できえ、他の女性と話す貴方を見ていると胸がキューッと痛くなる。モヤモヤと曇つてしまふ。結ばれたら、きっと我慢できなくなつてしまふわ。それくらい貴方を想つているの」

それで、貴方に嫌われてしまうかもしれない。だから嫌なの。

白銀は脳味噌を揺さぶられた。その声、仕草は四宮家の帝王学に基づいた一子相伝の奥義。

スキル「純真無垢」  
カマトト

しかし、ここで『そんなこと!』俺だって『云々』などと返そうモノなら、かぐやの告白を認めたも同義。故に舌を噛んで、痛みで動搖を搔き消し言葉を返す。

「ふつ、馬鹿を言うな。俺は結ばれたとして、そう安く縛られる男ではない。だが、真に

愛する者へは特別甘く優しく接するつもりだ。こんな風にな」

そう言つて、かぐやを抱きすぐめる。かぐやは頭が真っ白になつて顔が熱くなる。ハグをされ、白銀の体臭や触感で蕩かされてしまいそうになる。そして、その言葉も本心からのものであると理解できてしまう。かぐやの意識は朦朧となる。

白銀とて、ただで済んだ訳ではない。抱き締めているかぐやの柔らかさ、シャンプレーかリンスかの良い香り。覚悟を決めていなかつたら、幸福のあまり気絶していただろう。

しかし、無意識のかぐやの行動は白銀をさらに追い立てる。かぐやは白銀の胸に顔を埋めて、大きく息を吸い込んで打算なしの言葉を溢す。

「……すきい」

言葉は、口にすればするだけ嘘っぽくなつていく。故に、好きだの、愛しているという言葉は互いに出来るだけ避けていた。かぐやにシンプルな好意を伝えられたのはいつも振りであつたか。その手前の自身の体臭を吸い込むという行為もまた、愛らしく感じた。これだけ、はつきりとした好意は拒めない。

しかし、トドメの一撃は譲らない。腕の力を若干強くして、かぐやの耳元に囁いた。  
掠れてしまうような、とても小さな声で  
愛している。と

果たして、この状況でそんな言葉を言われて、正常に思考を働かせることが出来る者は居るだろうか。いいや、いない。

しかし、頭は沸騰しても、まだ心までは渡せなかつた。

かぐやは抱き締めの痛みで思考を取り戻し、愛の言葉を囁かれたがギリギリ致命傷で踏みとどまつた。はいと言わないのは、もはや意地である。そして、声をあげる。

「うあ、い……い、痛い！ 痛いです！ 一度離してください」

と言つて、白銀を突き放す。護身術を習つていなかつたら危なかつただろう。白銀も早めに拘束を解いたので怪我はなかつた。

「お、お気持ちちは、た、大変良く分かりましたわ。ええ、良く」

「お、おお。そ、そうかあ。それならいいんだ」

流石にお互い先のそれに恥を感じたのか、震えた声で話し合う。かぐやに至つては敬語に戻るくらい動搖していた。

「では、このチケットをどうぞ」

「ああ、ありがとう。では、週末の昼下がり辺りに映画館で待ち合わせよう」

「ええ、楽しみにしています」

約束の事務的なやり取りをして、互いにその場を去る。双方、夕陽のせいか頬が赤らんでいた。

◆本日の勝敗

引き分け

◇理由

互いに意地を張つて、敗けを認めなかつた為